

# タケ

牧 幸 男

冬の寒さに耐える三種の植物を表す言葉に「歳寒三友」がある。三友は松竹梅で、おめでたい植物の代表とされている。この中でタケは、新年の飾り物に良く使われるが「松は千歳、タケは万代を契る」の言葉が示すよう長寿にあやかり使われるのである。また、冬でも青々とし雪にも折れない強さに秘められた力があり、不思議な霊力がこもる植物の印象があるのかもしれない。更に、昔の人は風でタケ林がざわめく時、その雰囲気に神が降臨する状態と思ひ、タケを神事や呪術に使ったり、生命に関係する医療に使う神聖な植物としてイメージしていたと考えられている。俳句では竹について「竹の秋」は春の季語、「竹落葉」は夏の季語、「竹馬」は冬の季語として使われている。

一口にタケ（竹）と表現しても、広義には、イネ目イネ科タケ亜科に属する植物のうち、木本（木）のように茎（稈）が木質化する種の総称である。タケは気候が温暖で湿潤な地域に分布し、アジアの温帯・熱帯地域に生育している。

タケは私達にはポピュラーな植物であるが、種類は生育場所により、熱帯性のタケ類、温帯性のタケ類、中間型に大別できる。東南アジアへ旅行すると、タケがススキに似た株の形で生育し、街路樹に利用しているのを目にすることがある。日本のタケと熱帯のタケの生育の違いに気がつくであろう。

タケが花を咲かせることは極めてまれであるが、花期は4月から5月

にかけてである。一部のタケ類は周期的に開花し、一斉に枯れることが知られている。その周期は極めて長く、ハチク、マダケの場合は約120年周期であると推定されている。しかし、まだ周期が分かっていない種類も多い（日本におけるモウソウチクの例では、種をまいてから67年後に一斉に開花・枯死した例が2例（1912年→1979年・1930年→1997年）記録がある。一般にはおおよそ60年から120年周期であると考えられている。

植物学的には日本のタケの染色体数は48、熱帯の竹は72である。ここで、染色体数が三で割り切れる点に注目して欲しい。タケに関する数は、3を基数として倍数性があるからだ。『竹取物語』（900頃）のかぐや姫は、三寸の大ききで生まれ、3ヶ月で成人している。また、タケの字は6画、生長は3ヶ月で成竹に、開花期は60年、高さは目通りの60倍、最高の高さは36m（タイサンチク）と、いずれも三に関係がある。タケは分類上10属64種23の変種があり、日本では150種程生育している。このうち三大有用タケは孟宗竹、<sup>まだけ</sup>苦竹（別名はニガダケ、<sup>はちく</sup>真竹）、淡竹（別名は唐竹、呉竹）で、孟宗竹は元文元年（1736）に渡来し、後2者は日本自生植物である。このタケは、日本列島には人間が住む以前から生育し、一番古い記録は『魏志倭人伝』（297）を始め、『古事記』（712）や『日本書紀』（720）等多くの文献に登場している。古事記や日本書紀の記述では、タケノコは伊弉册美命の生命を救う特別な力を持った食べ物として出てくる。

古くから日本人の生活と強く結びついてきたことは、私たちが日頃何気なく使っている漢字に、竹を冠した字が多いことに気が付く。生活用品、楽器、占い関係、人体関係等広い分野に使われている。更に、竹冠はつかないが茶道、剣道、弓道、尺八、扇などはタケがないと成り立たない。次の表は竹冠が付く主な漢字である。



東南アジアの竹



タケの街路樹（チェンマイにて）

項目	漢字
呪術用具の竹器	笙 <small>ぜいちく</small> 、篳 <small>そ</small> 篥 <small>そう</small> 、筮竹、箏等
武器	竿 <small>のぼり</small> 、範 <small>かがり</small> 、箒 <small>や</small> 、箆 <small>もち</small> 、箆 <small>やじり</small> 、笞、策、簇等
日常用具	箒 <small>き</small> 、管 <small>ささら</small> 、籠 <small>ふるい</small> 、箕 <small>すだれ</small> 、笠 <small>みの</small> 、笊、箱、篩、簾、篋等
漁労用具	簍 <small>やな</small> 、筏 <small>いかだ</small> 、竿等
竹を利用する用具	茶杓、茶筴、尺八、竹皮、笹船等
人間と関係	笑筋、箒、箆、算、筑、篋、菅、簡、笞、簿、籍等
竹に関する言葉	竹の園、竹林の七賢、竹馬の友、木七竹八堀十郎、木に竹を接ぐ、木もと竹うら、成竹あり、竿竹で星を打つ、竹に油を塗る、竹を割ったよう、破竹の勢い等

竹は実生活に深い関係があるように古くから歌題の対象となってきた。

**わが屋戸の いささ群竹 吹く風の 音のかそけき この夕かも 大伴家持**  
**筍の 親竹遠く はえにけり 村上鬼城**

植物名の由来は、本居宣長(1730~1801)によれば丈が高いので「高」から転化したもの、鹿持正澄(1791~1858)は「高生」の短縮と述べ、漢字に「竹」をあてている。別名には古くは陀気、多気、棚開、多計などの他、青君、青土、青瑠玕の表現もある。学名は三大有用タケのみ紹介すると、モウソウチクは *Phyllostachys pubescens*、マダケ *P.bambosoides*、ハチク *P.Nigra* で、属名は *phyllon* (葉) + *stachys* (穂) で葉片のついた苞につつまれた花穂の意味でイネ科を示し、種小名はそれぞれ細軟毛がある、タケに似た、黒色と外観から名付けられている。

竹の生活面の利用は前述したが、食用では筍が滋養強壯の食べ物として有名である。中国の『二十四孝』には、後世の範として、孝行が特に優れた人物24人を取り上げている。この中の「孟宗」には孟宗が幼少に父を亡くし年老いた母を養っていた。「病気になった母は、あれやこれやと食べ物を欲しがった。ある冬に筍が食べたいと言った。孟宗は竹林に行ったが、冬に筍があるはずもない。孟宗は涙ながらに天に祈りながら雪を掘っていた。すると、あつと言う間に雪が融け、土の中から筍が沢山出て来た。孟宗は大変喜び、筍を採って帰り、熱い汁物を作って母に与えると、たちまち病も癒えて天寿を全うした。」この話を多くの画家が題材にしており、歌川国芳の「二十四孝童子鑑」や葛飾北斎の「寒中筍」等が画題としている。

薬用は中国最古の『神農本草経』(250~280頃編纂)等に竹葉、竹茹ちくじょ(皮茹)、竹根、竹実、竹歴、竹黄ちくじゆん(天竺黄)、竹笋たけのこ(筍)、竹筒酒、神水等が紹介されている。効能の多くは、解熱、鎮静、口渴、利尿、嘔吐、筋脈の痙攣などの利用が示されている。わが国でも「竹林の周りで育った人は病気にかからず、長生きする。」との言い伝えがあるほか、様々な病に使われてきた。特に、5月5日(旧暦では6月初旬頃)の降雨後に竹を切った際、節にたまった水を「神水」と呼び、肌につけるとシミ、ソバカス、シロナマズに特効があると伝えられてきた。また、濾過して獺かわうその肝を混ぜ丸薬にすると、心傷の癢を治す特效薬として貴重品であった。

真意はともかくとして、竹は伝言が多く残っている植物である。

花言葉は、「節度」「節操のある」である。



雪中筍取の図(北斎)



タケノコ